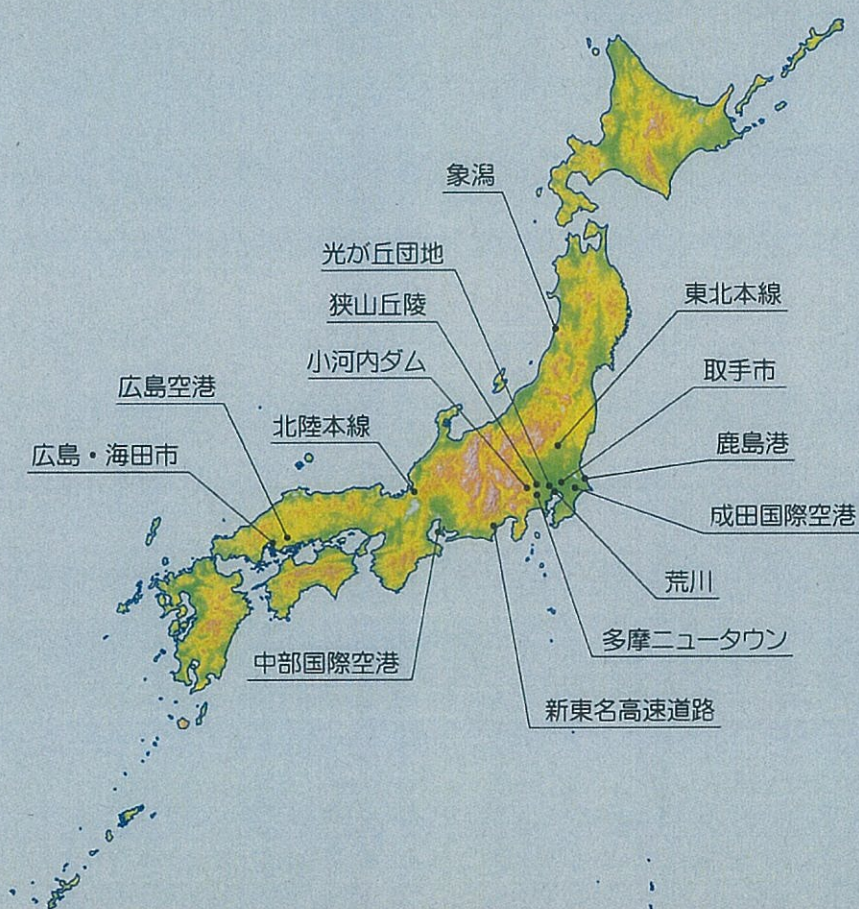


地図は測量された時点の大地の姿を描いています。各時代に作成された地図を比べてみるとその地域の変化を見てとることができます。大きく変貌した地域はもちろん、何十年たってもほとんど変わらないものがあることに驚きを感じることもあるでしょう。ある時代のその時だけの土地のようすが記録されていることもあります。ときには、戦時中の地図のようにその当時の世相を映し出している場合もあります。地図を見て、新たな発見を感じてください。



象潟・芭蕉が詠んだ景勝地は今!!

火山と地震活動が育てた象潟（きさかた）の生い立ち

みちのく秋田の名所「象潟」の今日の姿は、まさに、自然の営みの中で育まれてきたといえます。私たちは、この大地をともしれば永久不変であると考えがちですが、じつは、激しく活動する生命体と同じであることを認識する必要があるかもしれません。

■象潟の概要

象潟は今、田園を水面として小島が点在する景観にあります。しかし、その昔、この地は実際の海面（潟湖）に松林に覆われた幾多の小島を浮かべ、芭蕉や一茶などの俳人、文人を多く集める、松島と並び称される景勝の地でした。

■いにしへの象潟 その生い立ち

象潟は、紀元前 466 年頃に鳥海山の噴火活動に伴う一部山体崩壊で、海に大量に流出した土砂が、やがて波に洗われ、取り残された岩塊が大小幾多の小島となりました。その後、周囲に発達した砂嘴（さし）によってつくられた潟湖に浮かぶ小島には、松が生い茂るという秀逸の景勝地が形成されたのです。

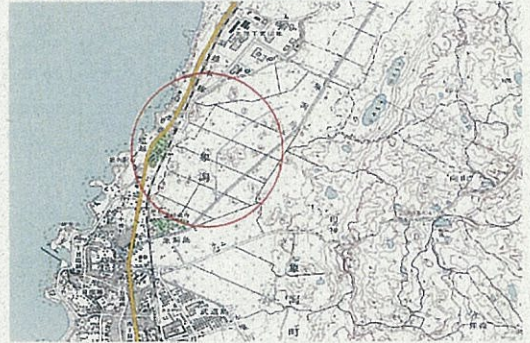
■象潟が遭遇した 地殻の変動

1804 年（文化元年）6 月 4 日に、マグニチュード 7.1 の象潟地震が発生しました。この地震による地殻変動は大きく、象潟で 180 ～ 200 cm ほど隆起しました。かつて東の「松島」に対して、西の「象潟」と並び称された潟湖の景観は、瞬く間に陸地と化したのです。

■象潟の変貌

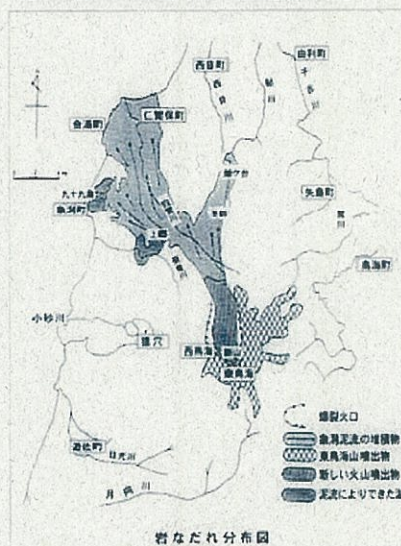
陸地と化した象潟には、やがて、水田開発の波が押し寄せ、かつての景勝地は消滅しようとしていました。しかし、その後の保全運動の高まりにより、この地域は水田地帯の水面に松の木を蓄えた小島が浮かぶ今の景観に保たれ、現在は、国の天然記念物に指定されています。

現在の象潟を表す地形図
2万5千分1地形図「象潟」の部分拡大図



出典：国土地理院

いにしへの象潟の景観の
生みの親となった鳥海山「岩雪崩分布図」



出典：象潟郷土資料館

鳥海山噴火の時期を明確にした「埋もれ木」



出典：象潟郷土資料館

象潟模型
（地震発生以前の潟湖に浮かぶ小島の模型）



出典：象潟郷土資料館

現在の象潟の景観
（かつての潟湖は、今田園地帯に…）



出典：象潟郷土博物館

象潟の水田に影を落とす小島
（潟湖に影を落とすいにしへの象潟の景観が偲ばれる）



出典：象潟郷土資料館

象潟のガイドマップ「象潟さんぽみち」



出典：にかほ市文化財保護課

利根川の南岸にも取手市が・・・

地図が語る対岸飛び地の歴史

関東平野を北から東へとゆったりと流れ、太平洋に注いでいる利根川は流路延長 322km、流域面積 16,840 平方キロを有する日本最大規模の一級河川です。利根川流域には、旧石器時代から人々の生活の痕跡があり、また、今日においても母なる川として人々の生活を支えています。この河川の流域の「取手」という一地域の人々に焦点を当て、その治水・利水の歴史の一コマを、地図を通してひもといて見たいと思います。

■最新の2万5千分1地形図「取手」 そこから見えてくるものとは…

最新版（平成19年更新）の「取手」の地図を見ていると、利根川の南岸に、ポツンと取り残されたように、取手市の一部である小堀（おおほり）地区の存在がわかります。

また、この辺りでは、県境が河川中央からはずれ、南側に大きく蛇行して陸地に食い込んでいます。

昔を知らない人には、この県境の蛇行とそれに伴い生じている取手市の対岸「飛び地」の存在は、地理的にも不自然さを感じるものとなっています。

2万5千分1地形図「取手」の一部拡大図

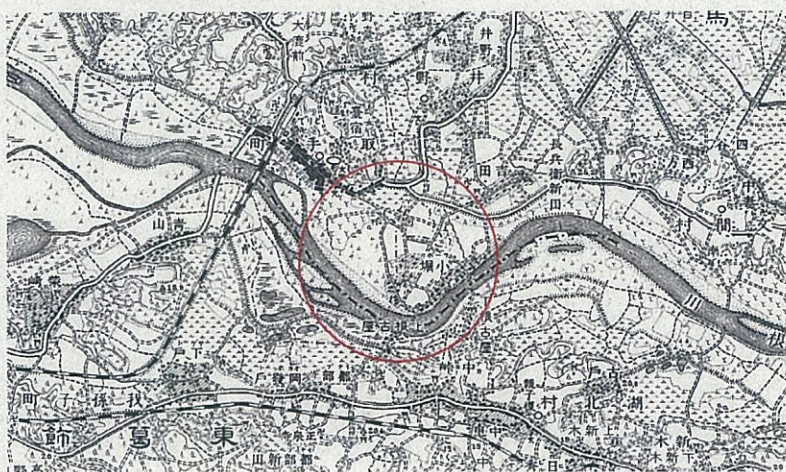


■旧版図の5万分1地形図「龍崎」 が語る真相とは…

そこで、古い版（明治36年測図）の地図を見てみると、小堀（おおほり）地区は取手中心部としっかりと地続きになっています。

この時代を隔てた新旧2枚の地図の違いの要因を究明するため、利根川の治水・利水の歴史をひもといて見ますと、明治44年（1911年）から大正9年（1920年）にかけて、取手市の南側で大蛇行して流れていた利根川の河川改修工事が行われていたのです。その結果、小堀（おおほり）地区は取手市の「対岸飛び地」として、新たな歴史を歩んでいたのです。

5万分1旧版地形図「龍ヶ崎」の一部拡大図



■「小堀（おおほり）の渡し」の誕生について

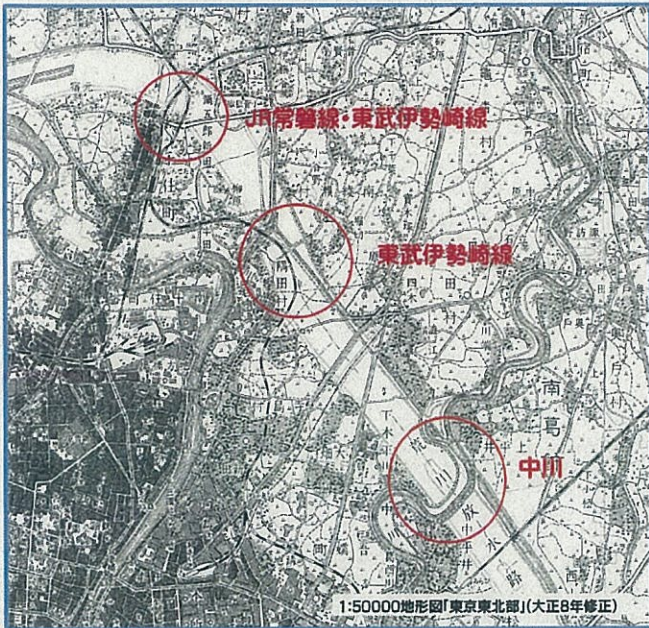
利根川の改修工事の結果、極端な蛇行による河川の氾濫はなくなりましたが、小堀（おおほり）地区の人たちは、広い利根川で分断されたことで、取手市街への交通が大変不便になりました。そこで、この不便さを解消するため、地域住民の協議で渡し船が始まり、今日に至っています。また、県境は旧河川跡である古利根沼の中心を変わずに通っており、改修前の河川の流路を物語っています。

今も地区の足となっている「小堀の渡し」の情景



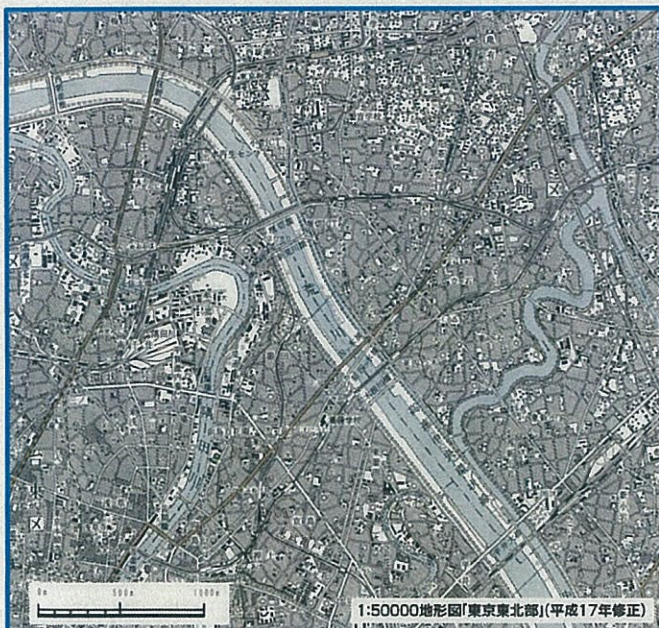
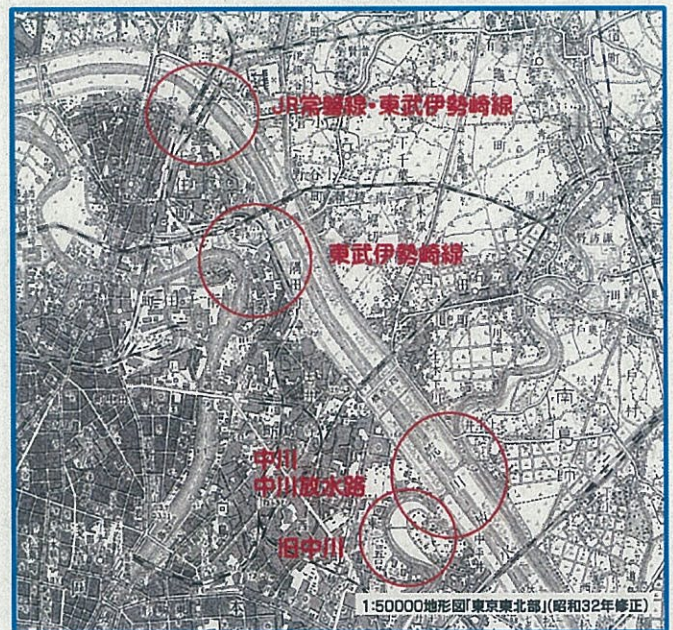
都市の真ん中に描かれた白い帯の謎 (荒川放水路)

荒川は、かつて利根川の支流で下流部は隅田川から東京湾に注ぎ、たびたび水害を引き起こしていました。1907(明治40)年・1910(明治43)年の大洪水は被害が大きく、東京下町の洪水防止対策のため、隅田川の東側を開削して新たな放水路を建設し、荒川を分流する計画が立案されました。この大工事は、1911(明治44)年に着手して19年後の1930(昭和5)年に竣工しました。



放水路は建設中で、中川もほぼ旧流路のまま残り、また、鉄道及び道路も建設前の形状のままでしたが、その他はすべて地図上から消えてしまい白い帯状になってしまいました。

放水路は完成し、中川も分断されて上流部は葛飾区上平井から中川放水路として放水路に沿って東京湾に注ぎ、一方、下流部は墨田・江東区を流下して再び放水路に合流しています。常磐線は放水路に直角に横切り、東武鉄道伊勢崎線も堤防に沿う形に路線変更されました。



近年、放水路左岸は、かつて水害の被害を受けた地域も建物密集地として変貌を遂げ、右岸とともに工業用水の汲み上げによる地盤沈下から海拔0m以下の地域が広がるなど深刻な問題が生じました。

グランドハイツから公園・住宅団地へ (光が丘公園・光が丘団地(東京都板橋区))

「光が丘」は、第二次世界大戦の戦前戦中には日本軍の飛行場、戦後は米軍宿舎(グランドハイツ)として利用されてきました。さらに返還後、公園・住宅団地へと大きく変化しました。



広い空地は「成増飛行場」の跡地でした。



グランドハイツが建設され、住民用の足として、東武啓志線が延びていました。



グランドハイツの周辺部は宅地開発が進みました。



1973(昭和48)年に米国から全面返還され、元の広大な空き地となりました



地域一体開発のため、北側に「光が丘公園」が整備されましたが、南側にはあまり住宅が見られませんでした。

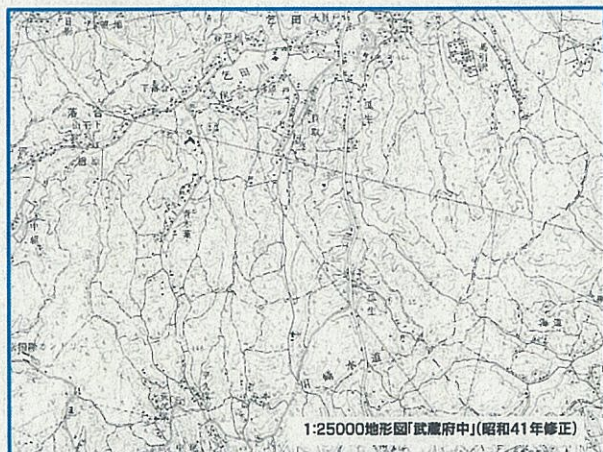


南側に都営地下鉄大江戸線が1991(平成3)年に開通するなど、住宅が整備されてきました。

丘陵に生まれた新しい町

(多摩ニュータウン)

多摩ニュータウンは、稲城市・多摩市・八王子市・町田市に広がる標高100～180mの多摩丘陵に都内の住宅不足を補い、乱開発を防止して住みやすい土地供給のため計画・開発されました。



開発前は、所々に集落のある近郊の農村地域でした。



第1次開発の永山・諏訪地区に入居が始まりました。



京王相模原線が1974(昭和49)年、小田急多摩線は1975(昭和50)年に「多摩センター」まで開業しました。



建設に併せて、大学の誘致も進められ国士舘大学はじめ各大学のキャンパスが建設されました。



多摩地域の南北を連絡する多摩都市モノレールが建設中でした。



第一次の入居から約40年を経て、住民の高齢化・人口減少など新たな問題が起き、小中学校の統廃合行われています。(○印は廃止された小中学校)